
神父服の彼

蜻蛉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神父服の彼

【著者名】

蜻蛉

NZ082X

【あらすじ】

神父服を着た騎士の物語。

転生キャラではないのでご注意ください。

1・0 研究所（前書き）

不定期です。

今回は三人称オンリー

1・0 研究所

雲一つなく月が爛々と輝くある日。既に時間は深夜であり、多くの者は寝静まっている。

そんな時間帯の古びた研究所には一人の神父服を着た少年と、修道服を着た小柄な少女の姿があった。

研究所の中は長らく使われていないようで、至る所に埃が被つており散々たる状況だ。

「ホントにあんのかよ。」

「周りに気を付けてね。あんまり変な場所とか触つたらダメよ?」

「……ユニークンデバイスのくせに偉そうにしゃがって

「何か言つた?」

「別に」

自身の肩に乗る小柄な少女の声と研究所の状況を見て、溜め息を吐き、苦々しい顔をする。

少年は自身の赤い目をキヨロキヨロとさせ、何やら探し物をしているようだ。年の頃は、大体12歳といったところか。

あどけなさが全身から溢れており、研究所の異様な雰囲気と重なり奇妙な光景となっていた。

その少年は、一言で言えば端正な顔立ちをしている。

その顔は少女に間違われることはないだろう。

だが整つており同世代の子供達が見かけたら、10人中7人は振り向くであろう。

一方、少女は長い白金髪と青く澄んだ瞳をしている。そして端正な顔立ちをしており、修道服を着用していた。

その姿は可愛らしく、多くの者が好意的に彼女を見るだろう。

「おっ、これか」

「どうやら探し物が見つかったらしい。」

少年一彼は、長く腰まで伸ばした灰色の髪をなびかせながら、目的の場所まで歩く。

「ちょっとクウェス！いきなり触つたらダメよっちゃんと確認してからだからね！」

「発見、発見～」

そして古びた戸棚まで近付くと肩で騒ぐ少女を無視して、躊躇することなくガラス張りの扉を開いた

その時

辺りに騒々しくサイレンが鳴り立てて始めたのだ。それは一つのことが決定したことであり、研究所全体が赤い点滅ランプにより覆われ始めた。

「はあ！？何で警報装置が作動してんだ！？」

目の前にある回転灯と音を聴いた彼は、戸棚の中にあるモノをしつかりと取り出しながら、怒ったように声を荒げた。

「……だから勝手に触るなって言ったの？」

その少年の肩の上では、少女が田も当たらない、と言つた感じに呆れている。

「ルナ！何で止めてくれなかつたんだ！」

「アタシは止めたわよー！」の馬鹿クウェス！」

「ちがえよー！」の施設の防護機構をだー！」の馬鹿ルナ！

「！」に入る前にアンタが止めなくていいって言ったんでしょー！」

「……って、喧嘩してる場合じゃねえよ

「無視ー！？」

そう少女ルナが言つた瞬間、勢い良く研究室の扉が開いたかと思うと、次々に人型の魔導兵器が入つてきた。

その姿はスマートと書つ感じではなく、ちょっとやら そつとの魔法は効かなそうな「ゴツ」「ツ」とした外見をしており、手には凶悪そうな鈍器を持っていた。

「うわっ。捕縛用じゃなくて殲滅用の機体じゃないか。一体、ここ の研究所は何してたんだろうな？」

「どうせ禄でもない」とよ

「まあ、それはそうだが」

「ほり、早く片付けて帰るわよ

そう呑気に話をする一人に構うことなく、侵入者を排除するために動き始めた魔導兵達は素早く彼らに近付く。

そしてその一體が持っていた鈍器を躊躇なく勢い良く振り下ろした。

ドオン！という力強い音が辺りに響く。なかなかの力で振り下ろされたようだ。生身の人間では太刀打ちできないだろう。

砂埃が辺り一面に舞い、晴れる頃には彼の無残な姿が

「よええ」

晒されることはなかつた。

彼は、その場に立つたまま右手で鈍器を受け止めており、一方ルナは眠たげに目をこすつていた。

「ほら、目的物は入手したんだから早く帰ろうよ。シャツハにまた怒られるよ」

「へいへい。それにしても、昔のガーディアンは弱いのな」

彼がそう言いながら、右手に黒光りの魔方陣を展開させ、持つた鈍器に力を入れた瞬間

弾けた。

鈍器だけではない。それを持っていた魔導兵までもが、跡形なく弾け飛んだのだ。

「よええ

ルナに即され、歩きながら、赤い目をギラギラと獰猛に輝かせた彼は

「だが、練習相手にはなるか」

次の魔導兵（獲物）へと右手を伸ばした。

1・1 教会（前書き）

彼はどこかネジがずれてる設定

時代は新暦69年

この時代だと原作主人公達は13歳だったかな

「起きて！時間遅れちゃうよー。」

新暦69年。

それが今の年代だ。

そして、研究所からブツを確保して数日が経っている。勿論、任務は大成功だ。研究所は少し壊れたが、問題ないだろう。

「ちょっとクウェス？聞いてる？」

「うひせえな。聞いてるよ。」

私は、隣で浮かびながら、ピーチクパーク騒ぐルナに相づちを打つとベットから体を起こす。

ふと顔を横に向けると、窓からは朝陽が入り込み、部屋全体を照らしていた。

「やつせり朝が来たよつだ。最低で最悪な朝だ。

「言で言つねりば

「黙」

「まうまう、早く着替えて着替えて」

朝は苦手だ。何といつが……トンショングが、そのトンショングが上がるにいのだ。

「カリムのとこ行の明日によつせ。寝たい

「ダ・メ。新しい任務の話があるのよ

「……仕事めさべれ。他の奴に任せよつせ

「まうまうへー。」

再度言おひ、非常に朝はだる。やつして朝がやつてへるのだらう

か。永遠に夜だつたらいいのに。

「クウェス！」

それにしても

「せっかくから、ピーチクパーククソッセえよー起きてるよー私の頭
がフレコ^{フレコ}!!」このチビ^{チビ}が!!

人の耳元で叫ぶコイツにうんざりだ！怒鳴つてもいいだろうーもうちょっと静かに起こせないのか！

そう言つ」とだから、後一躍りさせてしまひおつ。

おお、ベジタの中は何と心地の良さりとか。」それなら一瞬にして

「……アウトフレーム・フルサイズ」

安眠できそうだな。

「ねやすつ」起きたなさー………「…わめわめー?」

……最悪だ。まさか、フルサイズになつてまで起こさうとは…？

今の私は首根っこを掴まれた猫のようである。非常に情けない姿だ。私は12歳だぞ！屈辱的だ！しかし、そんな羞恥心よりも今は

「……寝かせてくれ

「最初からこうすればよかつたわね」

聞いちやいない。コイツは私の話を全くと言つて聞いちやいない。

てか何だ？そのジト目は？

私の身長より15cm程高くなつたルナは、私を抱え上げながらジト目で此方を見ている。

喧嘩売つてんのか？

「あんだよ？やんのか？」

「これでも私は戦闘力においてはピカイチなのだ。

ただのユニゾンデバイスに負けるわけがない。ギッタンギッタンにしてやるよー

私に恐いものなどないのだ！

「……アタシのお仕置きとシャツハのお「よつしゃあ……」田舎せ、大聖堂！……」「

まったく、今日も良い朝である……べ、別にシャツハが怖いわけではないぞ！

あれから数時間後

シスター・シャツハの恐怖のお仕置きに怯え……ではなく、朝の眩しい光を受け、目が覚めた私は目的地まで歩き到着していた。

田的はミットルダ北部にある我らがセイオウサマーを崇める大聖堂。

ここには直属の上司であるカリムがいるのだ。

横でふわふわ飛んでいるルナを連れ立つて、煌びやかな光沢を放つ扉を開け、中に入る。

教会の広いエントランスには、様々な人間がいた。

私と同じ様に神父服の者、ルナと同じ様に修道服の者、そして騎士甲冑姿の者が目に見える。

奴らは聖王教会騎士団に所属する騎士やその見習い達だろう。朝っぱらからガヤガヤと元気良く騒いでいる。

朝から馬鹿みたいに騒いで楽しいのか？　騒ぐぐらいなら、私は睡眠を取るが……

そんなことを考えながら、奥にある執務室まで歩く私に、馬鹿共が群がってきた。

まつたく朝から困った奴らだ。

「あーおはよー」わざわざ！

「おはよー」わざわざ！

ふつふつふ、歩く度に人が道を開き、お辞儀をしながら礼節を取つている。

いやあ、私も偉くなつた

「おはよー」わざわざ！騎士ルナ！

「はー、嘘だ。おはよー」わざわざ！

……よつな感じだ……

それにしても

周りの奴らと楽しそうに挨拶をしているルナが眩しく見えるのは、
病気だろ？

そして男共がルナと挨拶する度にムカムカするのは何故なのだろう
か。

あとで医務室に行つた方がいいかな？

「また見習いの小僧と一緒にいらっしゃるね？」

「ガキのお守りなんて大変だよなあ」

「彼らのアイドルを独占しやがつて！」

てか、さつきから私を馬鹿にするような声と、殺氣がビンビン飛んでくるのだが

殺してもいいのだろうか？

うむ、殺氣を私に向けて放つと並んで、殺し合へをつむぐよ。」
と並んでいたんだよな！

「よし！殺し合いだ！」

出始めにルナと喋つて いるクソヤロウから殺し

「あだつ！？」

「何やつてゐるのよ。馬鹿なこと止めなさい。」

「おにすんだよー。」

「何でもかんでも壊す方向に考えるのが、止めなさいって言つてゐるでしょ？本当に怒るわよ？」

む……既に怒っているではないか。 そんなに怒った顔で言わなくてもいいじゃないか。

今から楽しい楽しい殺戮の始まりだったのに……

興ざめだ。

実際に興ざめである。

「せひ、行くわよ」

「へいへい」

殺し合こをするテンションでもないからルナの指示に従おう。

これ以上、ルナを怒らせたらシャツハが飛んでくるからな。

でもルナに近付いたクソヤロウ共は今度殺つておこう。

1・2 通路（前書き）

短い

今まで書いた中で最低記録更新

その後、周りにいた騎士達から見ると、ふわふわと浮かぶルナを横に従え

……ではなく、確実に従われたまま彼はエントランスを抜けたようだ。

「騎士ルナーおはよひいざれこますー。」

「はー、おはよひいざれこますー。」

「ハヨー」

「ひひーーちゃんと挨拶しなさいー。」

現在、彼は行く先々で挨拶をしているルナを横目に、おざなりに挨拶をしていたようだ。

ルナに注意された彼は、どこか不機嫌そうな顔をする。

「オハヨウゴザイマスー」

そして渋々と修道服を着た女騎士に挨拶すると、その場を去りつと歩き始めた。

「！」めんね

「いえいえ、昔に比べたら喋るようになつたじやないですか。

……でも独り立ちするのは当分先みたいですね」

「そうね。騎士になるのはまだまだ先ね。一人になんか危なくてさせられないわ」

「もう一度、学院に通わせないのですか？」

「あれから何回か通わせたはしたけど……ね」

そう会話しながら、一人が先行する彼を見ているトルナに言われた通り、挨拶はしているようだ。

「オハヨウゴザイマスー」

「おークウェス、おはよう」

挨拶された方の神父服を着た男性騎士は慣れたものである。

渋々とした顔で挨拶する彼に対して、元気よく挨拶を返し、喋り掛けた。

「聞いたぞ、任務成功したらしいな。このまま順調に行けば、来年には騎士になれるかもしないぞ」

「…………そ、う」

だが、彼は挨拶だけをして他は喋ることはありません、と言わんばかりに斯塔斯塔歩いていった。

「相変わらずだなあ」

そんな姿を見て男性騎士は苦笑している。そんな彼らを見てルナと女性騎士も苦笑して会話しようとするが

「ルナあー早くー」

何時まで経つても来ないことに痺れを切らした彼によつて、それ以降の会話は終わらせることになつた。

「はいはい、それじゃまたね」

「ええ」

その後、追いついたルナは彼を連れ立つて幾分か歩き、よひよひ執務室の一つに辿り着いたようだ。

田の前にある重厚な木製の扉に手を掛けた彼だが

「ストップ。ちゃんとノックして相手から」承があつてからよ

どうやら社会の礼儀の一つであるノックをせずに扉を開けようとしたようだ。

「前にちゃんと教えたでしょ？」

「めんどい」

（別にしなくても大丈夫じゃないのか？意味分からん）

そう考えた彼だったが室内に、自分に取つての強敵、

シャツハがいるかもしれないとも考へると、嫌々ながら扉を叩き相手の返事を待つた。

ノックをしてから数秒後、扉が室内の方から開く。その扉を開いた人物は彼の強敵、シスター・シャツハであつた。

彼女を見た途端、げんなりとした顔つきになつた彼は

「（汗）苦労である」

そう声を掛け、扉を開けた人物を極力見ないまま室内に入ろうとするが、そんな彼を出迎えたのは了承の返事ではなく

「あだつ！？」

青筋を浮かべたシャツハの拳であった。

「あにすんだーおわつー？」

いきなりの拳骨に、涙を目に浮かべた彼は反論じよつとするが、自宅でルナにされたが如く、首根っこを掴まれてしまった。

彼より背が高いシャツハは軽々しく持ち上げている。

だが、朝にルナも軽々しく持ち上げていたことから、どうやらシャツハの力が強いのではなく、彼が軽いようだ。

「入口で殺し合いとか叫んだそうですね。

やはりあなたはヴェロッサ同様、一度、みっちり教育する必要があ

るようですね！」

「ひいー…？や、やめ

怒りのオーラを纏つた状態のシャッハに掴まれた彼は室内に消えた。

1 · 3 執務室（前書き）

主人公は子供

1・3 執務室

執務室に入つた彼は、シャツハに首根っこを掴まれたまま、隣にある書庫へと連れて行かれた。

その道中

「ルナ、カリム！助けて！」

「あらあら

「シャツハ、きちんと教育して上げてね

「勿論です」

「裏切り者があ！てかカリムは私の声が聞こえてないのか！？」

「何だ！あらあらって！？」

「いり！暴れたら、もっと酷いことになりますよ！」

「ひいーー?」の悪魔があ！」

「私はシスターです！」

「あだつー?な、何も叩かなくてモ……」

と、騒がしく会話をしながら書庫へと消えた。

完全に書庫の扉が閉じるまで、騒がしさが消えることはなかつたが、閉じられると室内には静寂が舞い戻ってきた。

さすがは聖王教会の執務室と言つた所か。なかなかの防音性があるようだ。

そんな残つた一人にとって、今回のようなことは珍しくないのだろう。

「いきげんよう騎士ルナ」

「ええ、『Jきげんよう。騎士カリム』

二人は何事もなかつたように会話を始めるのであつた。

：

：

：

：

：

「今日はここまでです。クウェス？わかりましたか？」

疲れた。非常に疲れた。

現在は朝ではない。既に夕方だ。わかるか？

ゆ・う・が・た・だ！！

窓の外を見ると夕陽が今にも沈みそうな時間帯である。

……ここはあわだよ、シャッハの説教 + 勉強会。

まさか延々と休憩時間も無しに教育されることは想こもしなかった。

ひよひよと調子に乗って叫んだだけじゃないか！

かくしょつが！

……一の次は踏まなこよつにしなければいかな。

ふむ、今度からせ、思つても口に言わぬ心の中で溜めとけり。

「……聞いていますか？」

「ひやー？」

し、シャツハよ、顔が近いし怖いぞ。朝に見た、ルナの怒った顔が可愛く見えるほどのかわい相だ。

それでも、8時間も喋つてばかりだったのに疲れてないのか？

……「ライツ、本当に人間なのか？

……まさか……「ライツ……

ルナと同じ様にユーランテバイスではあるまいな。

もう……ありえるか。

なら差し詰め、カリムが主と言つたところか。いや……ヴェロッサか？

「ク・ウ・エ・ス？」

つと、考へるのは後に元より。シャツハの拳が飛んでしまつた。

「わかつたんですか？」

「イエス。殺人ダメ絶対」

そう、安易に人を殺すとか言つちやダメ。と言つた時に黙つたことだからちゃんと覚えていた。

今回はただ叫びたかったんだ！何か知らないがムカムカきてしまつたから叫んでしまつただけなのだ。

「やうです。やつと思い出したよつですね。次は忘れたら黙りますよ？」

「うむ」

忘れていない。ちゃんと私は覚えていた。

しかし、しかしだ、元はシャツハに逆らわないでおいで。それに

本当にムカついた時はいいよね？

さて、それよりも

「腹減った」

さすがに腹が減ったぞ。

とこりが今の時間帯だと昼飯を通り越して晩御飯になるではないか。

ああ……一食分の満足感が得られないとは、實に勿体無い。

1日3食は絶対なのだ！

「あら、もうこんな時間なのですね」

「時間がわからないほど熱中していた……だと

「誰のせいだと思っているんですか！大体あなたが……！」

「先程、今日は終了」と聞いた。シャツハセンサー、ありがとうございました」

再び説教系を始めようとしているシャツハにはつさぞつだ。隣の執務室に行こう。カリムとルナがいるはずだ。

「あつー。じり待ちなセー！」

シャツハなんて無視、無視。

今私は背中とお腹がくつつきなつなのだ。

早く家に帰つてルナの『』飯を食べたい！今日は何だらうか？

ワクワクしてきた

そう湧き上がる気持ちを抑えながら、私は執務室へと繋がっている扉を開けた。

むつ、ぢりやーるナは居なこよつだ。

カリムだけが高級そうな机で仕事をしている。どこへ行ったのだろう。

「あら、クウェス。シャツハとの勉強会は終わったの？」

「終わった……ん？ あ……し、しまった！？」

「ん？ どうしたの？」

わ、忘れていた。

「クウェス？」

⋮ ⋮ ⋮

執務室に備え付けられている書庫から出てきた彼を見てカリムは困っていた。

(どうしたのかしら?)

扉を開けた彼に自分が喋り掛けると口を開いたが、すぐに口を開ざして何やら考え始めたのだ。

その後ろでは首を傾げたシャツハが立つており、彼女でも彼が何を考えているのか、わからないうつであつた。

(ルナが居ないからかな?)

先程まで自分の仕事を手伝ってくれていたルナは、とある事情で席を外している。

彼にとつて親のような存在のルナが居ないことで寂しくなつたのだろうか。

と、考えたが

(それはないかな? ルナが居なくとも寂しがるような性格でもないでしょう。だったらお昼も食べないし、お腹でも空いたのかな)

そつ考えると席を立ち、側まで近寄った。

すると、彼は俯けていた顔を勢い良くガバリと上げた。

その顔は何やら思い付いたようにニヤリとした顔である。

そして彼は自信満々であるーーと舌づかのよじて開いたままである扉を拳で叩いた。

「部屋に入つてもいいだろうか。騎士カリム？　　私は入室したいぞ！」

危ない危ない、ノックをするのを忘れていた。再びシャツハの説教は嫌だからな。

普段はやらなくても大丈夫だと思つが、ここにはシャツハがいるか

うな。

わちんとせねば。

そう考えた私は一度、扉を開める選択を取らつとしたが、素晴らしい案を思い付いたのだ。

やつを

ノックをし忘れたのならノックをすればいいじゃない！

ところ、素晴らしい案を思い付き、扉を叩いたのだが

目の前でこのカリムの様子が変だ。顔を赤らめて目は潤ませ、全身がふるふる震えている。

怒っている。

私の行動は違うのか？

「もう、カリムに怒られても恐くないが一度戻るか

しかし聞いてみるだけ聞いてみよう。

「何が駄目だつ「可愛い」「むがつ！」

「…………んだと、いきなり抱きつかれたぞ！コイツは変態だつたのか！？」

「あなたもきちんと成長しているのですね。2年前に比べたら恐ろしい成長力です。ああルナが羨ましい。私も子供が欲しくなりそうです」

「ぐえええーー？」

ぐつ、抱き締められて声が出せない！とか子供扱いだとーー？

私は1-2歳だぞー！もう立派な

「今日はノックしなくてもいいのよ。でも相手のことを考えてくれたのね。本当に成長したわね」

つて胸に鼻と口が塞がれて息ができない、い、いきがあ……

「よしよし、良くなれました」

「…………」

「や、騎士カリムー離れてください。」のままではクウロスが窒息死しますよー」

「あいあい」

1・4 執務室のソファー（前書き）

彼は子供扱い

1・4 執務室のソファー

太陽が沈み、多くの者が夕飯を取っている時間。

とある執務室では、客人用の高級感溢れる黒いソファーに、カリムが座っていた。

横にはシャツハガ立つたまま、何やら書類を読み上げているようだ。

「子供のほっぺは、ふにふにね〜」

だが、カリムはただ座っているだけではない。

修道服に隠された自身の柔らかな太ももに、眠つている彼の頭を置いて座つているのである。

俗に言う膝枕状態だ。

そして彼の顔はカリムの女性らしい、しなやかな指先によつて遊ばれていよいよだ。

「わー見て、シャツハ！伸びるわ！？」

「あんまりクウェスで遊ばないで下さい。それより報告を……」

「もう少し待って。普段は過保護なルナのせいで、こんなことできなーんだからー今のうちに……」

教会内に問わず管理局でも美人と声が高く、絶大な人気を誇るカリムに、膝枕をされている彼。

端から見れば羨ましいこと、この上ないだろ？

だが、それは周りから見てであり、膝枕をされている時の本人は

子供扱いするな！

と田を覚ましていたら、叫んで拒んでいただろ？。

しかし、今の彼は寝ているのだから、どうしようもできないのが事実である。

「お持ち帰つしていいかしら?」

「黙りますよ。」

「む」

顔を掴まれて遊ばれている彼は、当然の「」とへ顰めつ面をしている。

だが

「はう……可愛い」

そんな仕草もカリムにとっては、可愛いらしい仕草に見えてるらしい。

完全に子供扱いな彼である。

「良い子　良い子」

顔を近付けて、そう言ったカリムは、垂れ下がってきた金色の光沢を放つ髪を耳に掛けながら悦に浸つてゐるよつだ。

そんな姿を見て、心の中で溜め息を吐いたシャッハは、カリムが満足するまで報告を待つのであつた。

それから大分経ち、ようやく満足したのか。笑みを浮かべ頬を上気させたまま、カリムは顔を上げた。

それを見たシャッハは長年の経験で分かつたのだろう。報告をし始める。

「前回の任務で、クウェスの騎士としての必要任務課程は半分がクリアされました」

「「」の子も頑張ったのね。よしよし」

「経つた一年で「」今まで漬き着けるとは思いもしませんでしたよ

再び顔を下に向け、彼の頭を撫で始めたカリム。

そしてシャッハは信じられないと、でも言わんばかりにそう呴いた。

その呟きを聞いたカリムは、悦の入った顔つきから一変して、哀愁感漂つ顔つきになると頭を撫でながら言葉を紡いだ。

「やつぱつ……」Jの子が戦闘用に造られたのも関係しているんですね……」

「……はい……クウェスは、Jと戦闘において既に騎士のなかでも上位に位置しますから……」

そつ話した後、一瞬の静寂が執務室を覆う。

しかし

「あと残つてるのは、表での活動や教会内での仕事だつたかしら？」

すぐさま、顔を上げたカリムによつて静寂は打ち切られた。

それに従いシャツハも何事もなかつたかのようにに装い、話し始める。

「はい、今後は教会内での仕事・管理局側との合同任務が大半になります。」

「そう。教会内での仕事は私も傍に居てあげれるわね。管理局との場合は、ルナが付いてるから大丈夫でしょうね。……あら？ そう言えばこの子、デバイスビニヤッたのかしら？」

「それなら、先ほど書庫のほうで……」

その後も、執務室に用事を終わらせたルナが帰つてくるまで、話は続けられた。

「只今、戻りました。つてカリム！ クウェスに何してるんです！ 離れて下さい！」

「あら、この子が望んだのよ？ それこそ起きせ、私に抱き付いて来ただから」

「そ、そんな馬鹿な……退いてください！クウェスはアタシの主なんですよ！…その役目はアタシがやります！」

「本人の意思を尊重しなきゃいけないわ。ほら見て、すげく幸せそうな顔してるでしょ？」

「むむむ……」

「カリムー、退いてください！」

「ルナは毎日一緒に居るんだから、今日ぐらいこ良いでしょ？」

執務室では、今だに寝ている彼の取り合いでしていた。

「アタシが面倒見るんです！」

しかもルナはフルサイズの姿に変わつており、カリムから彼を取り上げようとしているようだ。

フルサイズになつたルナの大きさは、大体160cmを超えている
ぐらいで、年齢設定は18、9歳か。

冷水のような青い瞳。修道服に隠されてはいるが、しなやかな肢体
がそこにはあつた。

整つた顔立ちは、目の前にいるカリムにも負けてあらず、多くの者
を虜にする氣品に満ちた美しさがある。

そして、腰の辺りまである、若干ウェーブが効いた白金の髪が優雅に揺れていた。

「実質的な保護者は私よ？」

一方、カリムは彼を抱き締めたまま離そうとしない。

「そんなの関係ない！」

「くか～」

そんな騒がしい間も眠り続ける彼は、素晴らしい度胸が坐った人間であろう。

「騎士カリム。そろそろクウェスの訓練時間です」

その時、今まで我関せずといった感じに横に立っていたシャツハが二人に話し掛けた。

「あら、もうそんな時間？」

「うわあ……ホントだ」

一人が見た高級感溢れる柱時計は20時に差し掛かろうとしていた。
騎士見習いである彼は、夕食後の21時から戦闘訓練が課せられて
いるのだ。

「クウェス？起きなさい」

「起きて！訓練の時間だよ！」

訓練時間が差し迫っていることに気付いた一人は喧嘩を止め、彼を
起こし始めるが

「…………くか…………」

彼が起きることはなく、ぐーすか寝たままであった。

「もう、しょうがない子ね」

「あー、アタシがやります！」

「シャツハ、早く行きましょう」

「あ、ちよつとー。」

結局、カリムに抱かれたまま、彼は訓練場に連れて行かれたようだ。

その後、訪れた室内訓練場では

「なー!? カリム様に抱つー…… どうー?」

思わず、剣型のデバイスを落とす者

「教官！ 何故アイツだけ、何時も特別扱いなのですか！ アイツが化物なのは知っていますが、待遇が違います！」

「いやあの子は12歳だよ。君と4つも違うじゃないか。多めに見てやれよ」

「納得できません！」

皿身の坦洋騎士に食つてかかる者

「はあはあ、それにしてもカリム様もルナちゃんも可愛いな。はあ
はあ」

「いやいや、クウェスキゅんの寝顔の方が、はあはあ」

訓練でなのか、また別の意味でなのか、分からぬが息を荒くする者

といつた、騎士見習い達がいたそつな。

「……あ？」

「あ、やつと起きたの？」

羨望と願望、そして殺氣と嫉妬の視線を感じた彼は、よつやく皿を
覚ました。

“どうやら、心と身の危険においては、体が自動的に反応するらしい。

：

：

：

「意味が分からぬ。目が覚めたら訓練場？」

全く持つて意味が分からぬ

「ほら、周りは始めてるよ。クウェスも始めよっ？」

「ルナ、ちょっと待て」

現在は21時ジャスト。

既に太陽は沈み、教会も大幅に活動停止している時間帯である。

そんな時間に私は、聖王教会内にある屋内訓練場にいた。

いや実を言つと意味は分かるんだ。いつも通りの訓練の時間だろ？

周りにも数十人の騎士見習い達と、その上司である騎士達が訓練を始めているのが見えるからな。

騎士見習いである私達は、ほぼ毎日と言つていいほど戦闘訓練をしないといけないのだ。

それは騎士になるために最重要的ことで、しなくてはいけないことをだと言つのはわかる。

しかし、しかしだ。私は元気溢れる奴らと違つて

「お腹が空いているんだ。

ルナあ、何で訓練前に起こしてくれなかつたんだあ

「我慢ー我慢だよ。ね？」

「も、もう我慢は超えてる！ 食も食べてないんだぞー。」

現在の私は、既に一食も抜いているのだ。

ルナが買ってくれた高級らしい神父服の上からお腹を押されて呻くのは当然だらう。

「『』飯は訓練が終わつた後でね。準備はできた？ そろそろ始めるよ？」

私の肩に、腰を下ろしたルナはそう言つが……

何だか、いつもと違つて不機嫌だ。口調はいつも通りなのだが、足をぶらぶらさせ、どこか不機嫌そうな表情なのだ。

一体、どうしたのだろうか？

そんなことを考へてゐるとルナは、やる氣も気力もありません。と言つた感じの私を小さな手で撫でてきた。

「クウニスのためになるから頑張りつ。」

「むう……どうせ仮想相手だろ？あれは嫌いだ。」

感覚が微妙に違つし。と呟く。

そつ、仮想は実体と違つてあまり臨場感がないのだ。攻撃を食らつてもあまり痛くないし……

「ほりほり、終わつたらいっぽい」飯食べさせて上げるから

「むう」

「ね？」

「……帰りたい。帰つてルナの『飯食べたい』

「あら」

ルナは私の言葉を聞いた瞬間、先程までの表情が嘘だつたかのよう
に笑みに一変した。

今の言葉で表情が変わった？

意味が分からないな

「やつぱりカリムよりアタシの方が懐かれてるんだから」

よほど嬉しいのか、手を頬に当てる悦に浸つてゐるようだ。

つて、『飯のことを考えたら、訓練ビックりじゃなくなつた！

私は急いで壁際まで移動すると、設置してある端末を開く。

そして管制ルームにいる大人達に連絡を取ると、ここ一年で顔見知りになつた男に繋がつた。

。

『クウェス、どした？』

よかつた、別の管制官とは喋りたくないからな。馴れている男で助かつたよ。

「ううう、騎士見習いクウェス・ロクサス。訓練終了。帰宅する」

『ちよつーつまだノルマ達成して「帰宅する」……ツーッ――』

強制的に通信終了だ。

「いつのまは早く切った方が良いと、前にハヤテに教わったからな。

さてさて、トリップして思考が料理に向っているルナを連れて帰宅するとするか

「今日は何を食べさせてあげよつかなあ？お肉かな、お魚かな？」

「私は肉がいいぞ」

「あら、じゅあお肉料理にしようね。ウチにある食材で作れるのは……」

やったね

今夜は肉料理だ！

今日一日は散々な日だったから最後ぐらいは幸せにならないとね

ふう、やつビッグ飯にあつつけつー？

後方から何か来るー？

私は危険を察知して、すぐさまルナを抑えたまましゃがむ。

「つー？」

「あやつー？」

「はあッーーー！」

ブンッ！

すると、何やら氣合いの入った声と共に、何かが頭上を通り過ぎる

風の音が聞こえた。

あぶなつー？

「ち、ちよつとクウォースー？」

いきなり押さえられたルナは声を上げるが、今はそれどころじゃない！

「よつヒー。」

そのまま私は素早く前に転がる。そしてすぐに立ち上がりつつ反対方向

つまり攻撃を仕掛けてきた相手の方を向き、顔を見る余裕はないから、

「いきなり攻撃とはいひ度胸だな。一体、どこのどこのつだ。ああん？」

そう床に喋りながら、攻撃できる絶妙な間合いを取つて……取つて

……

「……シャツハセンセー……」

顔を上げて相手の見たら、絶望感に押しゃられた。

何故コイツがここにいるんだ！？

「クウェスー訓練をサボるとどうこう見ですか！」

貴様はカリムの護衛だらうが！？

「聞いているのですか？それにルナ！あなたが付いていながら……」

「え？な、何？どうしたの？」

既に帰つていたのではないか！？

「どうしたの？じゃあつませんよ。クウェスがいきなり帰つと
ていたんですよ」

「え！？」

ふと管制ルームがある二階部分を見上げてみると、周りの管制官達と喋っているカリムが見えた。

ちつ、道理で周りの奴らがギクシャクしているわけだ。

カリムは聖王教会内でかなりの立ち位置にいるからな。

そんな存在と普段は会つことが、稀である騎士見習い達は緊張しているのだろう。

「まったく！ルナ！あなたが付いていながら…………」「

「うむね。今かのあがねと稽練せむか？」

シャツハのお怒りの声を聞きながら視線を辺りにやると

騎士達は至つて何時も通りで、緊張しているのは騎士見習い達だけと言つのがわかつた。やはりカリムの影響か。

「いいですか？クウォス。あなたは自分の立場を……」

騎士甲冑に身を包んだシャツハはトンファー型のデバイスを手にして私にも説教を始めていたようだ。

まったく話を聞いていなかつた私だが、今にも戦闘とこいつのお説教が始まつそうな雰囲気である。

いかんな、デバイスなしでは分が悪いかもしけれない。

私も愛機であるヤクトを……

あれ？無くない？

「何時まで経つても訓練を始めないと思つたら、いきなり帰宅する。だなんて！」

シャツハのお説教を聞きながら懐に手を入れると我がデバイスであるヤクトフントがなかつた

や、ヤバい……無くしたかも……

ああ……だから、インテリジェント型がよかつたんだ。

確かに私のヤークトフントにも人格があるから喋りはするが、アーモドデバイスだからなあ

インテリジェント型みたいにサポートしてくれないんだよな

一体、エリで無くしたのだらうか

むつー今の説教から脱出するのに良い手が思い浮かんだぞ

「違うんだ、シャツハ。私の意見を聞け」

「聞いてください。でしょ、が、言葉を慎みなさい。」

ええ～～～まで突っ込んでくるのかよ。

「ヤクトがビリもないんだ。これでは訓練はできな～～。」

「左の内ポケットにはいつてるよ？」

え？ ルナ？

私が両手を広げシャツハに訴えると、肩に座るルナが、そもそも前のように喋り始めた。

てか左の内ポケットだとお？

私は左利きだから右側しか使わないと、元の通りマイシンは向を言つているんだ。

「たぶん、そこだと思つたんだ～。」

まあ一応探つてやるわ。どうせな……

「…………」

……ホントだ……

私がルナに言われた通り、探つてみると簡単に見つかった。

ロザリオを模した私の愛機、ヤークトフントが……

てか誰だ！こんな場所に入れた奴は！

ルナが知つていたということは犯人はルナか！

しかも機能がOFFになつてているではないか！

誰だ！……あつ機能OFFしたの私だ。

昨日、ルナがヤクトに用覚まし時計を設定していたから〇一二〇二にしたんだった。

「あるじゃないですか。さつと訓練を終わらせなさい。今日のノルマを達成したら食事に行きますよ。何時もの追加訓練は無しですから頑張りなさい」

なん……だと……

今日はルナの「飯だけでなく、シャツハ達からも「飯を頂けるだとかー！」

「頑張りやすーー！」

「やったるぜー！」

ヤクトも機能を〇一二〇二にした

(「なんばんは、マイスター」)

無機質な年老いた男の声が聞こえる。いつも通りの声に安心するよ。
「ごめんよ機能OFFなんかにして。

「訓練開始だ。準備を頼む」

【「indowh」】（了解）

そう喋ると、調整を始めたヤクトを待つため、また訓練で怪我をしないように柔軟や体操を始める。

あ、そうそう。

ヤークトフントは別名、獵犬という意味だ。誰が付けたかは分からぬいが、なかなか気に入っている。

まあ大方、私に聖王教会の獵犬になれ、という同祭達のメッセージがあるのだろう。

優しいカリムとルナに保護されてよかつた。別の司祭達だったら私をここまで成長させることはできなかつたかも知れないからな。

そう言えど先程まで怒つていたシャツハが居ないな。お得意の移動魔法で管制ルームまで戻つたのか？。

まあ、いいか。どうやら、戦闘は回避したよつだ。よかつた、よかつた。

といづかアイツも晩御飯を食べてないからお腹が空いているのだろう。

だからイライラして、トンファーで殴ろつとしたに違ひない！

まったく、食い意地が張る奴だ。

「準備はいい?」

「ああ

彼の返事を聞いたルナは、すぐさま空中に現している画面を操作し始めた。

一方、彼は自身の手にある銀色のロザリオを模したデバイス、ヤクトフントを眺めている。

ただ普通のロザリオと違つて逆十字になつていて、だ。

また銀一色かと思いきや、十字の中心点に黒光りする小さな球体が3つ埋め込んでいる。

これがデバイスのコアなのだろう。

それに加えて幾つもの鋼色の鎖がジャラジャラとついていることがら、普段は首をかけるネックレスタイプであることが予測できる。

「ヤクト」

【Anfanog】（起動）

略称で名前を呼ばれたデバイスは呼びかけに答へ、無機質で年老いた男性声を上げた。

一瞬、淡い光が彼を覆つたかと思うと、普段通りである神父服の彼が姿を現す。

違つ点は手や足に銀色に光り輝く金属型の手甲やブーツを装着していることだらう。

特に手甲には黒光りする小さなコアが両方ともについている。

そして、その右手には一つの武器が掴まれていた。

ただ音もなく、静かに手中に収まる一つの武器。それは白銀のフレームで出来た一メートル弱ほどの戦斧であった。

先端には槍が付いておりその横には斧頭。そして反対側には突起が

取り付けられている。

どれも本物と見違わんばかりの鋭利さを醸し出していた。

その下には黒光りするコアと、灰色の六連装のオートマチック型、カートリッジシステムが装着されている。

ヤークトフントは曰わくハルバートタイプのトバイスであるようだ。

「それじゃ、始めるよ」

「了解」

準備が整つた彼にルナの声が届いた。

氣のない返事を返す彼であつたが、表情は至つて真剣であり、目の前の広いグラウンドの一角まで歩みを進める。

「さてさて、訓練と言えど、やるのならば真剣にやらなうことな

そんな彼の横では、先日、彼が倒した魔導兵に似ている形の魔導兵

器と戦つている騎士見習い達が見えた。

「…………」

一体倒すのに四苦八苦している騎士見習い達を見た彼は、侮蔑するわけでも嘲笑うわけでもなくただ無機質に眺めていた。

「…………腹減った」

そんな彼が歩を進めた場所でも、背後にいるルナの操作によって20体もの魔導兵が虚空から姿を現す。

「始めるよー。」

「うむ」

ルナの声に頷くと、黒光りする二角の魔方陣——古代ベルカの術式を、足元に展開させた彼。

「早く終わらせたいからな。速攻で決めるぞ」

【J'a】

声に呼応した戦斧に彼が力を込める。すると戦斧は煌々とした金色の光明を放ち始めた。

刃先まで、その光が届くとバチバチと切つ先を金色にほどばしる電流が帶電する。

彼自身が持つている魔力を雷電に変化させ、戦斧に付与したようだ。

変換した魔力を高密度に付与し、打撃として打ち込むのは変換資質を持つベルカ式術者の基礎にして奥義と言える技法である。

彼はどうやら雷の変換資質を持っているようだ。

バチバチと電流を放出する戦斧の柄を魔導兵に向け、槍の穂先を背後にやる。

「ふう」

そして一息吐くと

【Donner well】

「雷光一閃！――！」

淡々と喋るヤクトの声が出た後、彼は氣合いを入れた声を上げて、戦斧を振り払うように横に薙いだ。

未だ、魔導兵と距離があるのに薙いだのだ。

すると

バチツッ！――！

戦斧の斧頭から金色の閃光が迸り、放たれた雷光は大気を焦がしながら魔導兵に襲いかかった。

彼は打撃ではなく雷をそのまま放出したのだ。

近距離用の武器しかを持っていない魔導兵は、防御体制をとるもの

の、為すすべもなく攻撃を受ける。

高密度に圧縮、放出された雷光はいとも簡単に魔導兵を撃ち抜き、前面にいた三体が崩れ落ちる。

「初撃成功つと」

その光景を見た彼は満足げに声を出し

「さてさて」

普段より深い笑みを浮かべる。そして調整するよつて、今だ電流迸る戦斧を頭上で何度も回転させる。

「早く終わらせて、飯を食べないとね」

そう呟いた矢先、右手で先程と同じ様に構えた彼は、一気に魔導兵の中に飛び込んだ。

その俊敏たる動きは、長大な斧を手にしているとは思えないほどの速さだ。

たつた一人で魔導兵の群れに突入した彼は絶妙な間合いを取りながら自身の戦斧を振り回す。

横に一閃すれば真っ二つ

縦にも一閃すれば真っ二つ。

魔力によって増幅・銳利化した斧は次々に魔導兵を葬り去る。

まさに躊躇。

今彼にはこの言葉が似合うだろう。

彼が槍やピックを使わず、斧頭だけを振るう度に魔導兵の数は減つていった。

この程度の相手には斧頭だけで十分と言つことだらうか。

「あと八体」

そつ啖きながら、片時もその動きを止めることはなかつた。

「あはっ」

無我夢中で斧を振り回した彼は、気づかないまま、無邪氣そうに笑ひ。

心から何かを破壊することを喜んでいるのだ。

「」

笑みを浮かべ、ギラギラと獰猛そつた瞳を輝かせた彼は、まさに猶犬のじとく魔導兵に襲い掛かる。

「」

「」

「」

そんな歪な笑みを浮かべる彼を見てルナと、管制ルームから見る力

リムは悲しそうに頭を伏せた。

一方、同じように周りで訓練をしていた見習いの誰かが

「……化け物……」

そう囁くのが聞こえた。

その数秒後、開始早々にして全ての魔導兵が駆逐され、彼の訓練は終了を迎えるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8082x/>

神父服の彼

2011年11月11日05時12分発行